

特別支援学校における他職種連携を理解するための研修に関する検討

～他機関と連携したチーム支援を目指して～

横浜国立大学教育学研究科高度教職実践専攻

渡部 千佳子

1 社会的背景

児童福祉法及び障害者総合支援法の一部が改正され、これを受け、子どもたちを取り巻く制度においても教育、医療、福祉、労働の連携を意識した施策の取り組みが進んでいる。また、横浜市（2012）の教員のキャリアステージにおける人材育成指標でも教職専門性の一つに「連携・協働力」が位置付けられ、他機関との連携、協働やネットワークを形成する資質や能力の向上が求められている。

しかし、現実にはまだ課題がある状況だと考えられる。連携がうまくいかないのには、それぞれの機関に要因がある。教育に関しての要因について、大石（2017）は学校教員が養成段階および現職となった後も他の職種との連携の必要性や意義について系統的に学ぶ機会を得ることの難しさと多くの教員が他機関との連携、協働に対して慣れていないことを指摘している。

2. 学校課題と研究の目的

特別支援学校の生徒は、在校中、卒業後と長期間に渡り、日常生活や人間関係、就労定着等支援のニーズがある。多くのケースは学校と福祉、医療、労働等との連携が必要となる。しかし、本校知的障害教育部門高等部教員の事前アンケートの結果から、教員の他機関への知識や理解はまだ低く、実際に連携支援をした経験も少ないことが分かった。現状の生徒たちの抱える課題を考えると、教員は他機関を理解し、連携して支援を行うことができる力を養う必要があるのではないだろうか。

そこで、本研究では教員が連携した支援を体感的に学ぶためにケース会議のロールプレイを実施する。他の役となり、それぞれの役割や機能を知るとともに、他者と協働して問題解決することを通じて、「聴く」「伝える」「他者の視点を知る」力を向上させることを目的とした研修を行うことを考えた。

3 課題解決の方法

対象教員を教員経験やケース会議の経験の有無によりA、Bグループに分け、3回のロールプレイを用いた研修（同一テーマ）を行う。1回目、3回目は対象教員がロールプレイを行う。2回目は実際に専門職にロールプレイを行ってもらい、その様子を対象教員がモニタリングし、終了後に質疑応答を行う。3回の研修はビデオ録画し、研修後に振り返りアンケートを行う。3回の研修終了後、対象教員に半構造化インタビューを行う。

この振り返りアンケートと3回の音声録音、ビデオ録画、対象教員インタビューを分析し、その効果について検証する。

4 結果と考察

対象教員は、専門職によるロールプレイのモニタリングを通じて、次のような変化や気づきがあった。

- ①3回の取組後の自己の変化や他者の変化への気づきが生まれた。
- ②それぞれの他機関の役割や機能への知識が深まった。
- ③「聴く」「伝える」等話し合いの際に必要なスキルが向上したと感じる者が多かった。また、他者になることを楽しみながら、他者の視点を感じる事ができたという者もいた。

体験とモデリングを組み合わせることで、自身の変化に気づき、改善するための方法をモデリングから見出すことができたのではないかと考える。

今回のような教員が主体的な取組を行う研修は、教員自身の自主的な学びにもつながっていき、研修として有意義なものとするのではないかと考える。

【先行研究・参考文献】

大石幸二（2017）特別支援教育の実践深化に学校ソーシャルワーカーが求められる理由、発達障害研究 39、157-163

横浜市（2012）教員のキャリアステージにおける人材育成指標